

平成27年度 授業研究会実施レポート

西伯郡中学校授業づくり研究会

1 期 日 平成27年 6月26日(金)及び11月24日(火)

2 場 所 (両日とも) 岸本中学校コンピュータ教室

3 参 加 者 (両日とも) 岸本中学校教職員, 郡内各中学校教員 他

4 指導助言者 (6月26日) 岩手県滝沢市教育委員会 指導主事 早川貴之 先生

(11月24日) 東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース 教授 市川伸一 先生

5 研修内容

(1) 『教えて考えさせる授業』の研究授業及び授業公開【両日とも】 *別紙指導案参照(国語、英語、社会)

(2) 早川先生による指導助言【6月26日】

『教えて考えさせる授業』の基本的な流れを、以下のように整理していただいた。

- A 教師が「説明」したら、
- B 教師の「説明」の裏返しを生徒が他者に説明し、
- C 教師が「説明」したことを「反対から見たらどうなるのか」という視点からつくられた課題に取り組ませることで理解を深め、
- D 学習方法・学習内容・学習意欲の視点から自己評価させる。

①板書の構造化

…学習課題が書かれていない授業がいくつかある。生徒も教師も共有して使えるツールとしての黒板を活用すべき。小学校の先生の方が黒板が構造化されているので見習うべき。

②自己評価

*授業のおまけとして扱っている授業がいくつかある。また、自己評価の内容が直前の内容に引きずられる授業が幾つか見受けられた。上田中学校では、授業の終わり(自己評価直前)に教師が黒板を活用して、授業で学習したことを20秒以内で、端から端まで歩きながらおさらいした上で自己評価に入るようにしていた。こうする(教師が振り返ってくれた)ことで、生徒はその中から自己評価できる。つまり、生徒が考えているからこそ自己評価できるといえる。

*生徒の書く自己評価の内容が薄いと感じる。そもそも、授業者は「何を書かせたい」と考えているかが大切。上田中学校では、「自己評価で子どもを伸ばす」ことを目指して取り組んできた。自己評価には「～によって〇〇がわかった。だから、▲▲に使いたい。」や「～によって〇〇がわかった。だから、▲▲したい。」などのように、「学習内容」「学習方法」「学習意欲」の3点から書かせたい。ただ、すぐには書けない。授業者が意図したことを書いた生徒に言わせたり、コメントを返したりしながら、1年間ほめ続けて強化する必要がある。

③評価規準

…評価規準の「B」を明確にして欲しい。上田中学校では、理解確認ができることを「B」とし、理解確認ができない(「C」)生徒に対する手立てを考えていた。そして、理解を深める段階である理解深化で「A」を目指すようにしていた。

④「説明」と「理解確認」の関係

…特に数学では、理解確認では計算問題に取り組むことが多い。しかし、そもそも理解確認は、教師が「説明」したことの裏返しである。そういう視点に立ち、解き方を教えたのであれば教えられた解き方を他者に説明するなど、教えられたことを表現してみる活動を設定する。従って、説明以上のことを求めるわけではない。

⑤「理解深化」

…理解確認の課題を設定する際、「何を深めたいのか」「何を深めるためのものなのか」を考える必要がある。
そこで、次の3つの視点から理解深化の課題を考えると効果的である。

- (1) しくみがわかる (より深くしくみがわかる)。
- (2) 知識と知識がつながる。
- (3) 見方や考え方が変容する。

⑥時間管理

…時間管理は教師にしかできない。どんなにいい授業でも、1分オーバーしたら価値が10%減少し、2分オーバーしたら20%減少してしまう。

(3) 市川先生による指導助言【11月24日】

本会員の授業について、以下のような御指導をいただいた。

- ・ 本時の目標 (めあて) を明確に設定する。そして、本時の目標 (めあて) を板書する。
- ・ 板書計画を立てる。
- ・ 教えたことは、何を、どういう順序で、何を使えば、効率的に教えられるのかを計画立てる。
- ・ 何を予習させ、その予習を活用して教える時間を短縮する。
- ・ ICTを活用して、教える時間を短縮する。
- ・ 黒板に残すもの (事項) と ICTで見せるもの (事項) を使い分ける。
- ・ 困難度 (つまずき) 査定を行い、難しいところにこそ、時間を使う。軽重をつけて説明する。

その上で、『教えて考えさせる授業』づくりについて、以下のように整理していただいた。

- ①「考えさせる」の段階は、アウトプット活動であり、教えられたことをベースに考えないとできない活動としてとらえる。
- ②つまずきの想定 (困難度査定) と手立てを用意する。つまずきの想定がずれていると、分からないままで終わってしまう。
- ③日常から理解深化課題をつくる習慣をつける。教師自身が疑問を持ったことをアレンジしてつくっていくとよい。
- ④説明が長くなってしまふ人は、自分の授業をビデオに撮って自分で見て授業改善するべきである。
- ⑤理解深化に協同的な要素を取り入れる。(個人→小グループ→全体→個人という流れが基本)

6 研修のまとめと今後の方針

(1) まとめ

『教えて考えさせる』授業は、「習得すべき内容をしっかり教える (教師の責任を果たす) ことで、その後の問題解決の段階にみんなで取り組み、それによって理解を深めていくことができる」授業理論である。つまり、「知識があつてこそ」「知識を組み合わせる」「知識を使って」というように、「知識は活用してこそ意味がある」と捉えることができる。そして、マンネリ化どころか、追究しようと思えば、どんどん授業改善できるのが『教えて考えさせる授業』づくりという授業理論である。

このような考えのもと、うまくいかない『教えて考えさせる授業』の共通点を以下のように整理したい。

- ①全体として→ **目標やねらいの設定に問題がある**
 - ・ 習得目標が不明確、具体的でない (困難度査定) の失敗
 - ・ 授業形式 (4段階) へ機械的にあてはめているだけ
 - ・ 意味理解を軽視している (深い理解に到達させようという意図が薄い)
 - ・ 非日常的な実施 (授業研のみの実施)
- ②予習→ **あいまいな指示や負荷の大きすぎる課題**
 - ・ 意味理解やメタ認知につながらない機械的作業を課す予習

例) 「～回音読」「教科書の書き写し」

- ・子どもの負担が大きすぎる課題

例) 「問題を解いてくる」「全訳をつくってくる」

③教師の説明→ **教師の説明が、教科書をなぞるだけ**

- ・目標が不明確であるがゆえに、要点が要点とならない。
- ・「何を、どういう順序で押さえてほしいか」や「どんな方法だと効率的なのか」という指導法の工夫が不十分
- ・教師が説明することを抑制しようとして、一問一答に終始してしまう。
- ・子どもの誤答にひっぱられて、説明の流れが中断してしまう。

④理解確認→ **単なる自己評定になってしまう**

- ・意味を考えない暗唱や反復作業
- ・問題演習中心で、正解の丸ツケに追われて、支援や協同が希薄
- ・「全員の理解」を求めすぎて、授業が停滞してしまう。

⑤理解深化→ **活用や思考を促さない、単純なドリル的課題を深化ととらえてしまう**

- ・教師が教えたことと関連しない課題
- ・教師の説明が不足なため、取り組めない課題
- ・課題遂行中のヒントや板書、支援が用意されていない
- ・協同活動がはいらず、教師が個別対応しきれず終わる

⑥自己評価→ **単なる自己評定**

- ・発表や書き方指導のないままの儀式的な作業
- ・内容が感想や形骸的記述

(2) 今後の方針

授業研究会の日に特別な授業をするのではなく、「日々の授業実践で取り組んでいくこと」そのものこそ本会が重要視している点である。日常化という視点から共通している課題をまとめると、次の5点に絞られる。

- ①目標設定とつまずきの予測
- ②浅い理解から深い理解につながるような課題づくり
- ③理解深化の段階で、協同的な学びや問題解決的な学習を積極的に取り入れること
- ④時間配分
- ⑤自己評価の在り方

あくまで、この『教えて考えさせる』授業は、習得の授業である。「何を習得させたいのか」、「その習得させたい内容をどのように説明し」、「深い理解にどうやってつなげていくのか」が重要なポイントであることはいままでもない。しかし、生徒自身がどの程度理解したのかを、生徒自身も授業者も自己評価を通して把握することが不可欠であるにもかかわらず、おざなりになってしまっていないか。今一度、この点を特に振り返って、今後の授業改善に取り組んでいきたいと思う。